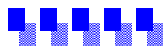


研究だより



香川大学教育学部 附属板出小学校

ごあいさつ

校長 たちむら みちよし
田村 道美
副校長 みやの しんや
宮野 真也

春陽の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本校では平成23年1月27、28日の両日にわたり、第94回教育研究発表会を開催いたしました。幸い天候にも恵まれ、県内外から延べ1,300名を超える参加者をお迎えし、盛会裏に終了することができました。

本研究発表会では、言語活動の充実による「思考力」の育成について提案いたしました。文部科学省から視学官・教科調査官5名の講師をお招きし、提案への賛同と貴重なご指導をいただきました。今後も、県内外の教育に資する実践研究を継続してまいります。

最後になりましたが、懇切なるご指導ご助言をいただきました香川県教育委員会、各市町教育委員会、香川大学教育学部、また、運営にご協力くださいました保護者、学生ボランティア及び関係各位に対して、心より御礼申し上げます。



< 目次 >

◇ごあいさつ	1	・外国語活動講演	10
◇第94回教育研究発表会を終えて		・分科会講演	11~12
・研究発表会の概略	1	・シンポジウム	13
・各教科の研究授業報告	2~10	・次年度研究に向けて・あとがき	14

第94回教育研究発表会を終えて

研究発表会の概略

知の更新をめざした「思考力」の育成(2年次) 一言語活動を充実し、思考様式を共有化する授業づくり

本年度研究発表会において、上記テーマの基、知が更新される過程と関連付けながら「思考力」を育成する授業モデルを提案しました。北は北海道、南は九州と広く日本全国から、昨年度を50名程上回る先生方の参会を頂き、盛会裏に終えることができました。

今年度は、2年次研究の成果として、大きく3つのことを子どもの姿を通して、提案しました。思考に有効に働く言語活動のタイミングは、自力解決の前後の場であること、情動を伴う体験が言語活動の裏付けとなり個の「実感・納得」へとつながること、集団の考えを発展させる集団吟味は、板書による支援によって集団としての「承認・合意」が図られることの3つです。

参会された多くの先生から、「『思考力』育成には、自力解決とその前後の言語活動が大切ということに納得した」「個々の子どもの『実感・納得』をめざした言語活動、それを実現する教材開発が素晴らしい」「集団での『承認・合意』をめざした言語活動、その支援として板書の重要性を確認できた」「『実感・納得』『承認・合意』を通して図られる思考様式の共有化は、遅れて進む子どもにとって考える有用な手がかりとなる価値ある試み」等、高い評価をいただきました。

また、新学習指導要領全面実施を2か月後に控え、5名の文部科学省視学官、教科調査官の先生方のご講演やシンポジウムについても「大変具体的で、4月までにすべきことが見えた」「新しい評価から学習指導の改善を図る大切さが分かった」「シンポジウムでの教科を超えた思考に働く言語活動の話が興味深かった」等、大変好評でした。課題については、思考の系統や発達段階に応じた言語活動がリフレクションでの主な話題となりました。

職員一同、寄せていただいている期待の大きさに感謝の気持ちを忘れず、日々の実践で子どもに返していけるよう精進しようと決意を新たにしました。



【体育館ステージでの4年国語科の授業】

各教科の研究授業報告

国語科

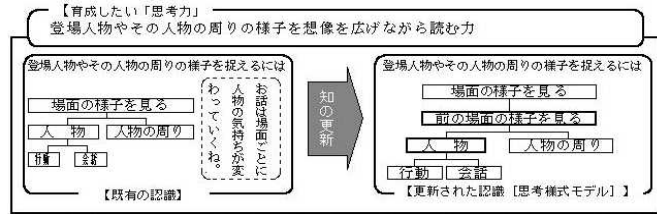
第1学年「すきなところをしょうかいしよう -『はるのゆきだるま』-」

しのはら ともこ
篠原 智子

本時では 「春のお土産を見ることができないままとけた雪だるまの気持ちは悲しいだけだ。」と多くの子どもたちが捉えていました。しかし「たくさんすてきな思い出ができてうれしい気持ちもあると思う。」という意見から、とけた雪だるまの気持ちは悲しいだけなのかを考えていくことにしました。

雪だるまの気持ちは悲しいだけじゃないと考えた子どもたちが根拠としたことばがどこに書かれているのかを見つけていく中で、「前の場面を振り返ると気持ちももっと分かりそうだ」ということに気付いていきました。そして前の場面の雪だるまの行動や会話文を手がかりにしながら、初めて春を感じることができた喜びや、それを教え届けてくれようとした動物たちへの感謝の気持ちもあることを全員で確認することができました。そうして捉え直した雪だるまの気持ちを一人一人が会話文にまとめて、前時に書いたものと比較しました。「前に考えたものと変わった。」「気持ちをたくさん考えられた。」と前の場面を振り返ることのよさを実感することができました。

本実践の目標構造



リフレクションでは 前の場面を振り返ることで、雪だるまの「悲しい」「うれしい」という相反する感情を子どもたちは見つけ出すことができていたとの意見が出ました。文部科学省教科調査官・水戸部修治先生からは「前の場面を振り返ることで後の場面ともつなげて読むことができていく。物語の展開をおさえて読む必要感が生まれるような言語活動を仕組むことが大切である。」とのご指導をいただきました。

国語科

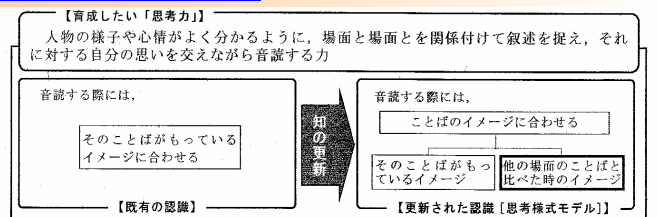
第3学年「思いをこめて、音読しよう -『サーカスのライオン』-」

にしおか よしくに
西岡 由都

本時では 金色に光り天にかけ上がるじんざに明るいイメージを抱いていた子どもたち。しかしそれは、じんざの死を意味していました。このイメージと意味のズレから、その姿を明暗どちらの声で音読すればよいのだろうか、という問いをもちました。そこでまず、「ぴかぴかにかがやくじんざだった。」という一文について話し合いました。初めは、「ぴかぴかで、明るい感じがするから。」「じんざが死んでしまったから。」と、明暗どちらの立場の子も、この場面の叙述だけを拠り所に理由を述べていきました。しかし、「初めの場面の老いぼれたじんざと比べると、明るいイメージがする。」という意見をきっかけに、他の場面と比べてイメージすることの大切さを、全体で「承認・合意」していきました。

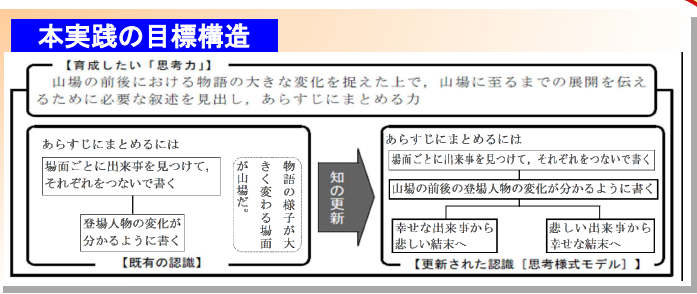
その後、この場面をどのように音読するかを、個々に考えました。明るい声で音読する子。じんざが5つの火の輪をくぐる決心をした場面とつないで、暗い声で音読する子。一人一人が、それぞれの思いをこめて、互いの思いを認め合いながら音読していきました。

本実践の目標構造



リフレクションでは 「子どもたちの認識のズレから学習問題が設定され、課題が子どもたちのものになっていた」という意見や、「他の場面とつないで考えることを確認した後、個人で考えさせたので思考の深まりがあった」という意見が出されました。ただその際、その考え方が一人の意見だけから取り上げられていたので、「もっと他の多様な意見も取り上げた後、個人の活動に入るようにすれば、より考え方の広がり期待できた」という意見も出されました。

本時では 自分のお気に入りの物語の魅力ポップに表すために、あらすじを短く効果的に表そうとする子どもたち。しかし、今までの「あらすじを書く骨」だけでは、うまくまとめることができません。では、上手にまとめられているポップは、どんな書きぶりしているのか。それを友達の書いた2例のポップから探っていました。



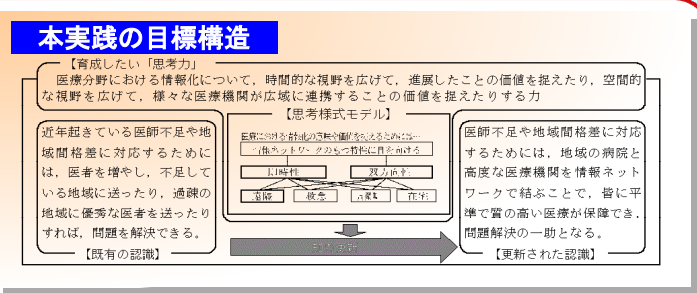
この2例のポップに描かれている文面は全く異なります。しかし、その共通点に目を付けると、「自分が大切だと思う場面を抜き出していること」、そして「ごんが変わるきっかけまでを書いて、それからどうなるかを秘密にしておくこと」などの新しい視点が出されました。

それらの視点をもって、ある子は『ごんぎつね』のあらすじを、またある子は自分のお気に入りの物語のあらすじを振り返りました。自分の思いを伝えようと、あらすじを捉え直した子どもたちからは、「この考え方は、ぼくなりに納得できて参考になった。」と学びを実感する言葉が表出されました。



実践を振り返って 共通の題材『ごんぎつね』での学びを自分の選んだ物語に活用することは、予想以上に難しいことでした。物語への思いが多様であるが故、ある1つの考え方をもってそれを表現に結ぶことに困難が生じたのかもしれませんが。個に応じ、より多様な思考のプロセスを想定しておくことが、「わたしのお気に入り」に寄り添うことにつながるのでしょうか。 ※本授業に関わって話し合われたシンポジウムについて13頁に掲載しております。ご参照ください。

本時では 小豆島の内海病院と、香川大学医学部附属病院が情報ネットワークで結ばれている事実に関心をもち、その意味を追究し始めた子どもたち。問いに対する考え方を話し合う中で、「結んでいるメリットを考える」「結んでいないとどうなるかを考える」等の見通しもち、個々に予想していきました。



「結んでいなかった頃には実際に『行って』相談していたけど、情報ネットワークによって、情報が早く送れるから、それだけ早く治療にかかれる」「行く手間も省ける」等の考えから見出した「早さ」という視点。「離れた場所でも情報をやり取りしながらより良い治療法が相談できる」等の考えから見出した「双方向性」という視点。これらのよさをさらに具体的に考えるために、患者と内海病院、附属病院の三者を「関係図」に表し、そのよさを納得していきました。

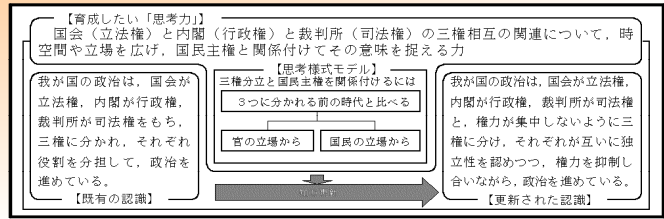


全国に先駆けて構築したこの「かがわ遠隔医療ネットワーク」。双方の病院の先生が語りかける言葉で自分たちの考えを確かめ、価値を実感した子どもたちは、医療の世界への明るい未来像をえがいていきました。

リフレクションでは 「関係図」を巡ってとりわけ議論が集中しました。本実践で提案した関係図をもとにしながら、1本の矢印の意味や背景まで書き込まれた関係図にすべき等、具体的な提案が出される中身の濃い議論が行われました。文部科学省・澤井陽介先生からは、「国民生活の向上」という指導要領に示されているねらいにさらに迫るためのポイントや「安心・安全」につなぐための手立て等、貴重なご示唆をいただきました。

本時では 大津事件を取り上げ、ロシアとの約束通り裁くことを支持する国会、内閣と、法律通り裁こうとする裁判所の対立を構造的に示し、学習問題「なぜ、児島は『法律通り裁くことが国民のためになる』と考えたのだろう」を作りました。解決の見通しを立てる場面では、「もし、法律通りでなかったら…と考えればいい」という

本実践の目標構造



反応を軸に話し合い、「国民の未来は…」 「外国との関係は…」 「国民にとって…」 「権力者にとって…」 と時空間、立場を広げてその影響を考えればよい、という思考様式が表出され、全体でそれを「承認・合意」していきました。

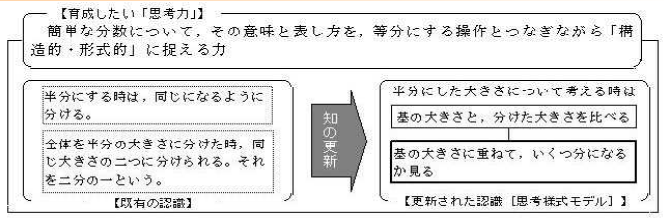
自力解決後、予想を検証する場面では、グループで資料を基に役割演技しました。伊藤博文貴族院議長、松方正義内閣総理大臣、児島惟謙大審院院長、国民になって、判決についての話し合いをシミュレーションしたのです。自分の主張とは異なる役割を演技することにより「児島は国民のために、人によってではなく、法によって裁くことを支持した」と「実感・納得」したようでした。最後に、「3つの権力は、独立していることによって、権力の暴走を防いでいる。国民主権の考え方」とまとめていきました。



リフレクションでは 見通し場面における集団での言語活動、役割演技を通しての体験を言語化する個の言語活動、三権分立を大津事件から考える開発教材、自分の思考を見つめる思考様式の取り組み等の試みに多くの賛同をいただきました。また、「子どもは学習問題に切実な思いをもっていただか」、「予想を表出した後の吟味をもう少し見たかった」等の貴重なご指摘もいただきました。

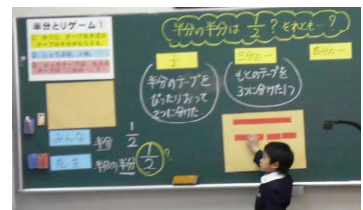
本時では 教師とのゲームに勝ち、『半分の半分』のテープ（もとの長さの四分の一）をもらうことになった子どもは、ゲームのルールを基に『半分の半分』の長さを、分数で表そう」としました。すると、二分の一、三分の一、四分の一と、意見が3つに分かれました。まず、それぞれの立場から、「半分をぴったり重なる2

本実践の目標構造



つの長さに分けるから二分の一。」 「もとの長さを3つに分けるから三分の一。」 「もとの長さをぴったり重なる4つに分けるから四分の一。」 と、わけを出し合い、次に板書に並べられたわけを「同じところ」「違うところ」の視点で比べながら話し合いました。そして、既習の思考様式「ぴったり重なるように分ける」を想起するとともに、新しい思考様式「もとのテープと比べる」を見出し、解決の見通しをもちました。

その後子どもは、各々が実際に『半分の半分』の長さのテープを作りました。そして、「ぴったり重なるように分けて、もとの長さ比べると、4つに分けた1つだと分かったよ。だから、『半分の半分』は、四分の一と表すんだね。」と、実際の長さのテープと、分数の意味と、表し方とをつないでまとめていきました。

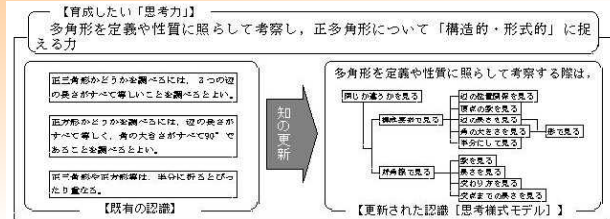


リフレクションでは 分数での表し方を考える必要感をもたせるために設定したルールや、自力解決の見通しをもたせるために、集団吟味の場で既習の思考様式を板書に位置付けて意識させた支援等の有効性について意見をいただきました。また、基準量を変えて見ると、同じ大きさを二分の一と見たり、四分の一と見たりできることを理解させるため、さらに、具体物の活用の仕方を工夫したり、「等分」の指導を充実させたりする等の代案もいただきました。

本時では 前時子どもたちは、辺の数が偶数の正多角形に「円の内側にぴったり入る性質がある」ことを調べるため、円の中心と重なる点を見つける活動を行いました。その際、「正多角形を2回半分に折り、2本の折り目が重なる点が円の中心になる」ことを見出していきました。

本時は、辺の数が奇数の正多角形にも「円の内側にぴったり入る性質がある」ことを調べました。その際、画用紙に正三角形を印刷することで、円の中心を半分に折って見つけられないようにしました。すると子どもたちは、「折らずに」円の中心を見つける方法について話し合い始めました。その中で出された、「半分に折った折り目と同じ直線がかけそうだ。」「折り目と同じ直線は、頂点と、向かい合う辺の真ん中を結べば引ける。」といった反応から、「半分に折らなくても、折り目と同じ直線を2本引けば、円の中心が見つかりそうだ。」と、思考様式「半分にして見る」を見出していきました。その後、実際に正三角形や正五角形が「円の内側にぴったり入る」ことを確かめました。子どもたちからは、「円の中心と重なる点を見つけるには、半分に折ってできる折り目と同じ直線を2本引くとよい。」と、思考様式「半分にして見る」のよさに気付く言葉が聞かれました。

本実践の目標構造

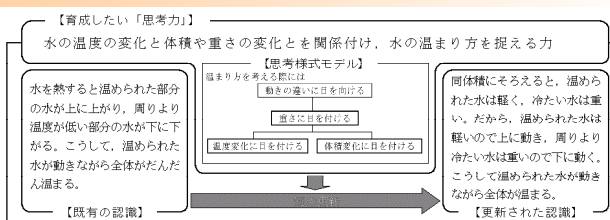


リフレクションでは 思考様式「半分にして見る」の「半分」の捉えが、「面積の半分」「対角線の半分」等、個によって異なっていたため、思考様式を十分に共有化できなかったのではないかといったご指摘をいただきました。文部科学省・吉川成夫先生からは、具体物を用いた活動と作図の違いを明確にした指導を行うこと、学年や発達段階に応じた系統的・発展的に学習を進めていくこと等、教材研究に関わる貴重なご示唆をいただきました。

本時では 温度が異なる同体積の水が入ったペットボトルを水槽に入れました。すると、一方は浮き、他方は沈むことを確認しました。子どもたちは、その要因として重さの違いに目を向けました。「同じ体積の水なのに重さが違うのはなぜか」について話し合う中で、「高温の水はふくらんで大きくなり、ふわっと軽くなるのだろう」や「温度の違いによって体積が変わることが関係しているのだろう」などの考えが出されました。それらの考えを板書上で整理していくことで、体積変化に目を付けるとよいことに気付いていきました。

実験では、常温の水を温めたり冷やしたりして、高温の水が上からこぼれ出す様子や低温の水の水位が下がる様子を確認し、それぞれの水を同体積にして重さを比べました。そして、高温の水の方が低温の水よりも軽いという結果を得ました。子どもたちは、「高温の水はこぼれた分だけ軽くなった」や「低温の水はつぎ足した分だけ重くなった」と、そのわけを表出しました。そして、対流（温められた水が上昇し、周りより低い温度の水が下降する）が起こる仕組みを重さの視点からまとめました。

本実践の目標構造



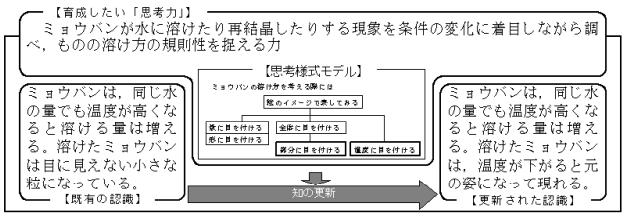
リフレクションでは 温度の違いにより重さが違うわけを話し合う場面で、イメージ図を用いて説明させたら、子どもの考えがより具体的に伝わったのではないかと意見いただきました。また、温度変化に伴う体積変化に目を付けて、重さの違いを捉えさせるためには、元は同じ重さであったことをしっかりと共通理解した上で、話し合えば、体積変化が重さの違いに関わっていることに自ら気付く子どもが増えたのではないかと意見いただきました。

本時では ミョウバン水の入ったビーカーの下側を加熱しながら、上側を冷却する場面を提示しました。「ミョウバンは溶けたままだよ。」「温度が下がるから元に戻るかも。」等、様々な考えが出てきました。そこで、ミョウバン水に変化があるのかどうかを考えていくことにしました。「下で加熱されているから…。」「冷やされて

いるすぐ横では…」イメージ図に表した予想を比較する中で、場所による温度の違いを根拠にしているという共通点が明らかになり、実験の視点として「部分」「温度」から考えていくことが「承認・合意」されていきました。

実験の結果、冷やしている上部では結晶のミョウバンが現れ、それが底に落ちモヤモヤを残しながら消えていきました。「上では、温度が下がったのでミョウバンが溶けていることができなくなって出てきたんだよ。」「下では、温度が高いままのミョウバン水だから、下まで落ちてきたミョウバンがもう一度溶けることができているんだ。」と、温度の違いによるミョウバンの溶解度と関係付けながら考察していきました。そして、温度の違いによって溶けたり姿を現したりするという、ものの溶け方の特性を捉えることができました。

本実践の目標構造



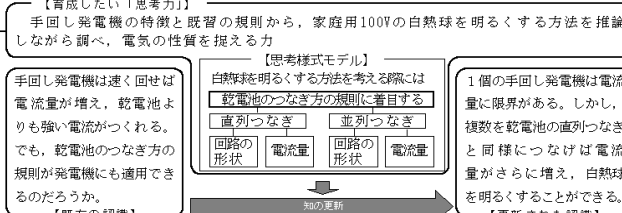
リフレクションでは 「予想の交流で、考えの根拠や差異点を明確にしていきたい。」「予想よりも、現象を元にした考察をもっと充実させるべき。」と、限られた時間内の言語活動の軽重の付け方について多くの意見をいただきました。協議が進む中で、物質の保存・循環についても考えられるように現象を捉えた後の考察に重点を置き、イメージ図を再考したりグラフとの関係を明確にしたりする方法について、多くの留意点が明らかとなりました。

本時では 1個の手回し発電機で白熱球をつけることができるか挑戦してみると、どの子もかすかに赤くなり、1個の発電機のパワーに驚き、また限界があることも感じました。明るくするために発電機を増やしたいというつぶやきから、学習問題「どうすれば白熱球を明るくすることができるのだろう」を設定しました。班4、

5人分の発電機のつなぎ方を考え、手回し発電機の直列つなぎと並列つなぎを表出し、予想を話し合いました。「乾電池のつなぎ方と同じように直列つなぎだけ明るくなる。」という意見と「並列つなぎは4つの電気が足し算されるので一生懸命回せばそれぞれの発電量が増え明るくなる。」という意見が出ました。対立構造を板書上で示しながら乾電池のつなぎ方の規則が発電機にも当てはまるのか否かを調べることを「承認・合意」していきました。

実験後、直列つなぎのときだけ明るくなった結果から、子どもたちは自ずと予想を振り返り、乾電池のつなぎ方の規則が当てはまると結論づけました。さらに、実験中にハンドルを回す手応えの違いに気付いた子どもからの意見「直列つなぎは重くて、並列つなぎは軽い」から、電流量の違いに目を向け、次時に検流計で測定することにしました。

本実践の目標構造



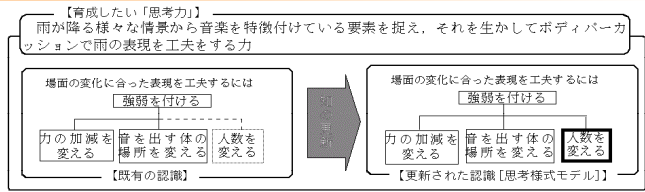
リフレクションでは 学習問題「どうすれば白熱球を明るくすることができるのだろう」と思考様式「乾電池のつなぎ方の規則に着目する」の関係について、「乾電池のつなぎ方の規則が当てはまるのかを学習問題にすればよい。」「思考様式の共有化の前に、自由に考えさせる時間をもっと必要。」等の意見をいただきました。また、実験と2つの言語活動の設定には時間的に無理があるので2時間扱いにするべき等の意見もいただきました。

本時では 雨の降り方がだんだん変わる

様子の表し方を考えようという学習課題を解決していく際、「はじめ」と「おわり」の場面の違いが大きいことから「だんだん変わっていく『なか』の場面があるはず。」という予想を立てました。実際に音で表すときにどのような変化が必要なのか、子どもたちは雨粒の数や大きさに目を付けて、強弱を変化させられることに気付きました。実際にボディパーカッションをまじえて考えていくと、「叩く時の力の入れ方を変えたらいい」「叩く場所を変えるといい」という既習の方法に加え、「人数を変えたらいい」ことにも気付きました。

そこで、この方法を使って演奏している作品『波』を聴き、人数を変える方法に着目した後、「なか」の場面の音づくりに取り組みました。だれがどのタイミングで音を出すと表したい強弱変化に近付くのか、ボディパーカッションで確かめながら、個々の「雨の設計図」を班で組み合わせていきました。このように、友達の声に自分の音を重ねていくことで、だんだん強くなっていく雨の表現を工夫することができました。

本実践の目標構造



リフレクションでは 学習する音の要素を強弱に焦点化し、「雨の設計図」で音を視覚化したことで、子どもたちはめあてをしっかりとをもって工夫できていたとの意見をいただきました。しかし、操作が複雑だったため、実際にボディパーカッションで表しながら音づくりをする時間が少なかったことや、鑑賞曲を音楽づくりに生かされていなかったというご指摘をいただきました。



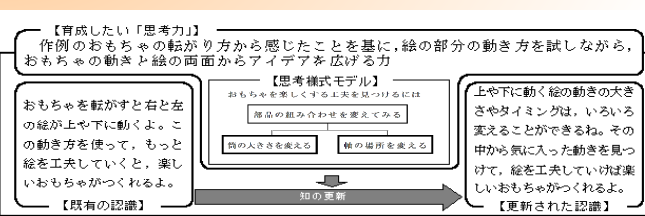
図画工作科

本時では 前時までにつくったおもちゃ

で遊ぶ子どもたち。その中に、教師も入って筒の大きな作例を転がすと、「先生の方がおもしろい。もっと他にもおもしろい動き方を探してみたいな。」と、動き方を変えたいという意欲をもちました。そこで、学習問題「動き方をいろいろ見つけてみよう」を設定しました。

ここで、作例の動き方の感じを共有化するために、動き方を手で動作化させると、「先生のは、『グルーン、グルーン』で、ぼくたちの、『クル、クル』でした。」と、オノマトペで動き方の違いを表すことができました。そのオノマトペを、作例を写した写真の筒の部分とつなぐことで、動き方と筒の大きさの関係が視覚化され、思考様式「筒の大きさを変える」が「承認・合意」されました。次に、絵の動きに焦点化できるように、共通のうさぎの絵を用いて個々に動きを見つけていきました。すると、筒の大きさによって、動き方が「ピョーン、ピョーン」や「ピョン、ピョン」になることが確かめられました。このような活動を通し、「筒の大きさを変えたら、おもしろいごきになるよ。」と思考様式の下さを「実感・納得」していきました。

本実践の目標構造



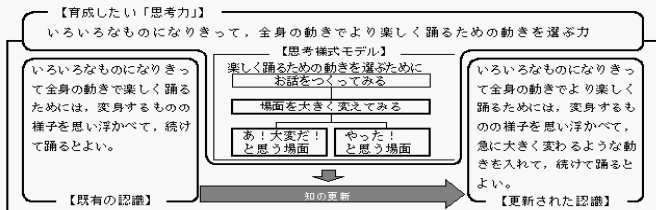
リフレクションでは 教師のおもちゃの動きを手で動作化し、それをオノマトペで表したことは、動き方と筒の大きさや竹ひごとの関係を捉えるために、有効だったというご意見をいただきました。ただ、共通のうさぎの絵を用いたことについては、最初から自分の絵を用いれば、「自分のおもちゃなら、どう動きを変えるか」という目的意識が明確になり、より思考様式が「実感・納得」できたのではないかと、というご指摘もいただきました。

本時では

虫や海のせかいのものに変身した子どもたちは、「散歩→□□→散歩」のように3つの場面をつないで簡単なお話にして踊りました。その際、真ん中の場面を4種類（散歩・食事・敵出現・嵐）の場面から選択させました。その中で、「敵出現」の場面を入れた踊りが一番楽しいという子どもたちが多く出ました。そこで、楽しく踊るひみつが何かあると考え、話し合いました。「他の3つを選んだ時より、急に走ったり跳んだりして動きが大きいかから。」と動きに着目した反応と、「急に敵が出てきてピンチだから。」と場面の変化に着目した反応を、教師が構造的に板書に整理しました。「急に大きく動きが変わるのは、場面を大きく変えているからだ。」と気付いた子どもたちは、自分のつくったお話を見直し、再度踊りました。

その後、踊りを見せ合い、「今日は敵が来た場面を入れたから、急にジャンプするところがあって、前より楽しかったよ。」と大きく動きが変化したことを互いに評価し合いました。このように、見ている友達と楽しさが共有でき、楽しく踊るための動きを選ぶためには、「あ！大変だ！と思う場面」を入れたお話にして踊るとよいことを実感していきました。

本実践の目標構造



リフレクションでは

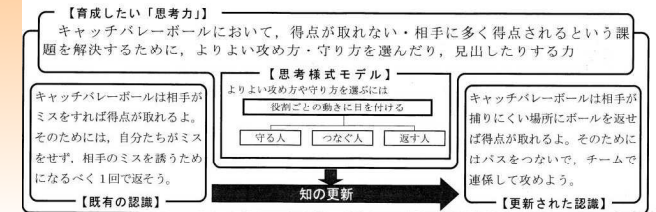
「友達と踊りを見せ合って評価する際、もっと個のイメージや動きを共有することが大切です。そういう場をもっと多くしていく必要があるのではないか。」という意見をいただきました。そのためには、見ている友達に「敵は、どのようなものなのか」「敵が出てきて自分はどう思って何をしたのか」というイメージや心情を具体的に言葉で伝えたり、体で分かるために友達の動きを真似したりする時間を十分にとるという代案が出されました。

本時では

点を取るためにはアタックが重要だということに気付いた子どもたち。ゲームの中でアタックをたくさん決めようとするものの、なかなか思うように決まりません。そこで、「アタックを決めるためにはどのような動きの工夫が必要か」考えていくことにしました。

そのため、まずためしのゲームやビデオからアタックが決まった際の動きを分析していきました。すると、子どもたちから「守る人がしっかりとキャッチしたから攻撃が始まった。」「つなぐ人がふんわりとしたボールを上げていた。」「返す人が相手がいなくて場所をねらっていた。」と、アタックを決めるためには、それぞれの「役割ごとの動きの工夫」が必要なこと気付いていきました。そして、役割ごとの動きの工夫を作戦の中に取り入れ再度ゲームを行いました。ゲーム終了後、子どもたちから「つなぐ人が素早くネットに近い場所に動いたから、打ちやすいボールを上げることができた。」「打ちやすいボールが上がったから、ねらったところにアタックできた。」と、役割ごとの動きを工夫したよさを実感することができました。

本実践の目標構造



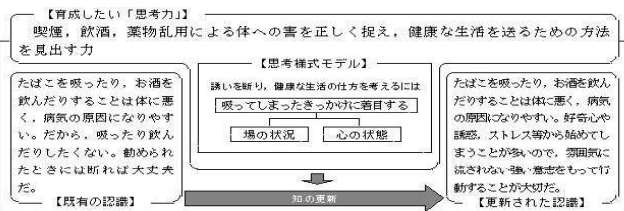
リフレクションでは

役割ごとの動きを工夫することで、具体的な動きの工夫を作戦の中書き込み、ゲームにも生かすことができているという意見が出されました。しかし、技能の差によって役割が固定してしまうのではないかといった意見が出されました。そこで、全員がどの役割も共通に体験ができるようなルールを工夫することや、アタックの技能を保障するためのドリルゲームを充実させればよいのではといった代案が出されました。

本時では たばこを吸い始めたことを後悔している大学生Aさんの事例を提示しました。Aさんは小学生の時から、たばこは体に悪いので大人になっても吸わないと言っていたはずなのに。そこで、なぜAさんがたばこを吸ってしまったのかを考えていくことにしました。

子どもたちは、「吸わないという強い気持ちが変わったのには、吸ってしまったきっかけがあったはずだ。」と、そのきっかけとなった出来事をグループで想像していきました。すると、「先輩に勧められたから断れなかったのでは。」「先輩がかっこよく見えたのでは。」「失恋して気晴らしに吸ったのでは。」といった、好奇心や周りの人からの誘い、ストレスなどが理由であると考えました。そして、子どもたちの考えた理由を整理していく中で、「場の状況」や「心の状態」が関係していることに気付いていきました。さらに、ロールプレイによって断ることの難しさを体験することで、「たばこを勧められると断り切れないのは、その時の場の状況や心の状態が大きく影響している。断るときには、誘いに負けない強い気持ちが大切だ。」と、雰囲気にな流されない強い意志をもって行動することの大切さに気付くことができました。

本実践の目標構造



リフレクションでは 吸ってしまった理由を板書上に位置付ける際、考えをカードに書かせておくことで、教師が意図的に整理することができ、「場の状況」や「心の状態」という視点が明確になったという意見をいただきました。また、教師の発問や助言を工夫することで、何が影響しているかという視点から、子どもたちに考えさせる場を設定する授業展開も考えられるのではないかと意見もいただきました。

英語活動

第2学年「朝食は何にしようかな」

きたむら あつこ
北村 篤子(HRT)・ Boivin Tyler John(ALT)

育成したい「思考力」 自分の食べたい物を相手に伝えるために、ジェスチャーを付けながら食べたい物の名前を言ったり、言い方が分からない場合は、“This one, please.”と言いながら絵カードを押さえたりして、適切な方法を選んでコミュニケーションを図る力

活動の様相 リズムに乗って歌ったり踊ったりして、楽しくウォーミングアップをした後、朝食で食べたい物を伝えたり聞いたりしていきました。“What do you want ?” “I want Udon.”の表現を用いて、HRTとALTがデモンストレーションをしました。日本の“Udon”が分からないALT。HRTが、はっきり言っているのに伝わらない状況を見て、「ジェスチャーを付ければ、きっと分かってもらえるよ。」と考えた子どもたち。ジェスチャーを付けることでALTは、“Udon”を理解することができました。その後、一人一人が自分の食べたい物を絵カードを用いて、ジェスチャーを付け、伝え合いました。

活動の途中、名前が伝わらなくて困っているペアが出てきました。「名前が英語で言えない時は、カードを押さえるといいよ。」と相手に伝える方法を見つけました。状況に合った適切な方法を選び、自分の食べたい物を伝えたり、友達の食べたい物を聞いたりして、積極的にコミュニケーションを図っていくことができました。



リフレクションでは 今回の活動の中で、ジェスチャーを付けたり、カードを指さしたりする以外に、オクラを伝えるために“Star”と言い、「形」を伝えてコミュニケーションを図っていた子どもが話題になりました。相手に伝える様々な方法は、低学年でも知っている「形・色・数」等を使うことも考えられるということでした。「思考力」の育成につながることから、単元の初めは、だれもが英語で言える食べ物を使って活動していき、慣れてきたらあまり英語での言い方を知らない食べ物も入れて活動してみるのはいかがでしょうか、という提案が出されました。

育成したい「思考力」

“What do you want to be?” “I want to be a ~,because ~.”を伝えやすくするために「ジェスチャー」や「絵」を用いたり、大切な単語を忘れた時には相手が連想できそうな簡単な単語に置き換えてみたりしてコミュニケーションを図る力

活動の様相

HRTとJTEが基本文型を使ったいくつかの会話場面を提示しました。その中でHRTはしばしば英単語を忘れてしまいます。それにより、子どもたちは、すぐに“want to be”や“because”を忘れても文脈から意味は通じるが、職業の単語を忘れたときは意味が通じないことに気付きました。「大切な単語が出てこないときにどうすれば伝わるか」という学習問題を設定し、個人、グループで考えました。子どもたちからは、「ジェスチャーを使う」「絵を使う」「関係する言葉を言う」の3つの意見が出てきました。既習のジェスチャーと絵に加え、3ヒントクイズのように相手が連想しやすい言葉を使う方法の有効性を教師と共に“carpenter”“make house（正しくはmake a house）”で確認した後、この方法を加えた職業カード取りアクティビティを行いました。

このゲームは子どもが“What do you want to be?”とJTEに尋ね、JTEは“I want to be a ~.”の「~」の単語を、ジェスチャーだけで示したり、簡単な単語に置き換えて示したりし、その様子を見た子どもは連想した職業の絵カードを挙げるというゲームです。慣れてくるとグループで行いました。このようにして意味が通じるか試していきました。

**リフレクションでは**

設定した思考力については、「日本語でも育てていかなければならない力である。」等の意見が出されました。文部科学省・直山木綿子先生から、「英語活動で思考力を育てる視点はよいが、会話場面での気付きを大切にしたい。日常の会話で子どもが「あれっ」と思ったことを学習問題に設定すればよい。」また、「体験的な活動（本時では職業カード取りゲーム）の時間を多く取り、体験を通して身につけさせたい。」等のご指導をいただきました。

外国語活動講演

直山 木綿子 先生 「評価から探るこれからの英語活動の在り方」

1 小学校で外国語活動を実施する際に考えておくこと

小学校で外国語活動を実施する際、運用面や発達段階に応じて考えておかなければならないことがある。

まず、1～4年生で外国語活動を行う場合は、学校裁量の時間を使うなど、余剰の時間を利用しなければならない。また、低学年では十分題材を吟味し、体を動かすような活動を設定すること、中学年ではできるだけペアやグループで聞いたり話したりするなど、耳や口を動かす活動を仕組むことが大切である。次に5・6年生では来年度から外国語活動が始まる。知的好奇心が高まる時期なので、頭と心を動かさせながら「なるほど」と心が納得するような活動を仕組むことが大切である。

**2 外国語活動における評価**

評価に関して、小・中で観点の言葉は似ているものの、それらの評価の内容は大きく違いがある。

まず、コミュニケーションへの関心・意欲・態度に関して、中学校では言語活動という視点が入り正確さが求められるが、小学校では言葉で通じ合う部分を中心になる。次に、外国語への慣れ親しみに関しては、小学校では活動で用いることが規定されている。慣れ親しむことを大切にしており、定着を重視していないことが分かる。最後に言語や文化に関する気付きでは、体験的という言葉が入っていることから、体験を通して気付くことを大切にしていることが分かる。

3 気付きを大切にした授業を

「言語や文化に関する気付き」とは、言葉のおもしろさや豊かさ、人と言葉でやりとりをする楽しさを外国語を通じて体験的に気付かせていくことである。世界にはいろんな人がいて、自分はその中の一員だということに気付かせてほしい。そのためにも、決して解説や説明にならず、子どもが気付くことで、次の段階に進むというような視点をもって授業に取り組むようにしてほしい。

分科会講演

国

水戸部 修治 先生「言語活動の充実を拠点とした国語科の授業づくりとその評価」

1 国語科において言語活動を充実させるためには

国語科において言語活動を充実させるためには、次の3つのことが必要である。

1つ目は、単元を貫いて言語活動を位置付けるということ。単元の中で言語活動をばらばらに捉えるのではなく、それらを有機的に関連したものとして位置付けるのである。例えば、1次で単元を通した学習課題を設定し、2次の「読む」活動と3次の「書く」活動を相互に関連させながら単元を展開していくのである。

2つ目は、付けたい力を確定し、それに合った言語活動を位置付けるということ。付けたい力を確定するためには、指導事項や年間計画を基に、目の前の子どもたちに必要な力を見出さなければならない。

3つ目は、子どもたちの意識を位置付けるということ。例えば、物語を場面ごとに精読させるような学習は、子どもの意識や実生活とはかけ離れたものであり、本当に必要な読む能力には結び付かない。お気に入りの本を選んで読む、大好きなところを見つけながら読む、そういった学習を展開する必要がある。

2 国語科における評価

評価規準を設定するためには、指導事項と言語活動を組み合わせる必要がある。指導事項だけに基づく評価規準は漠然としている。その単元で取り上げる言語活動において、その指導事項が具体的にどのような姿で達成されていけばよいのかを明らかにすることで、その単元での評価規準が見出されてくるのである。その際、いくつかの指導事項を柔軟に組み替えながら、言語活動を有機的に組み合わせていくことが求められる。



社

澤井 陽介 先生「社会科の言語活動を評価する ー客観性から妥当性への転換ー」

1 今、なぜ、思考力・判断力・表現力なのか

①PISA調査や学習状況調査結果の分析、②学校教育法第30条への規定、③言語活動の充実への要請、という理由が挙げられる。今回「表現力」を「思考力・判断力」と一体化したのは、それらは切り離せないからである。考えたことを表現し、表現したことで考える。この3つの能力は関連しているもので、一体的に育て、それを評価すべきである。その評価は、言語活動によって行う。学習活動を振り返りもう一度見直してきちんと説明する、そんな授業像が求められている。

2 社会科における言語活動の充実をどのように図るか

調べたことや考えたことを表現するのが言語活動である。ただし、考えるベースになる「蓄え (=事実)」をしっかりともたせることが大切。「蓄え」に裏打ちされた言葉は意味をもつ。こうした言葉をきちんと使わせるように仕向けていくことが、授業改善の視点になる。

3 効果的・効率的な評価をどのように実現するか

様々な授業場面で「この場面は何を育てるか」を明確にして評価に生かしたり、公平な場面で評価したりすることで、効果的・効率的かつ妥当性を保障できる。また、思考・判断・表現の評価は、結果だけでなく過程で評価することも大切。思考の途中で言葉を出させる、また最後にまとめを書かせる際にも、何度か投げ返す等、過程が見えるようにする。その子なりの思考の道筋を引き出して評価をすることが妥当性に繋がる。



分科会講演

算

吉川 成夫 先生「真の学力を育てる ー算数科における言語活動と評価の在り方ー」

1 算数科での言語活動の充実について

(1) 新学習指導要領での算数的活動

新学習指導要領では、算数的活動が目標の冒頭に位置付くとともに、各学年の内容として入っている。算数的活動の中には様々な言語活動が含まれているので、算数的活動を充実させていくことが言語活動の充実につながる。



(2) 算数科における言語活動充実の視点

言語活動は、思考力・判断力・表現力等の育成に重要であり、知識や技能の習得にも重要である。言葉に加えて数、式、図といった算数科特有の広い意味での「言語」を用いて、考え、説明する活動を充実させることが大切。説明の際は、「相手にも自分にもよくわかる」ことがポイントになる。

2 学習評価の在り方について

(1) 子どもの言語活動から学習状況を評価する

子どもたちの言語活動が、思考力・判断力・表現力等の評価の優れた場面にもなる。その際教師が、意図的に具体物を見たり操作したりしながら算数科特有の「言語」を使って表現させることで、学習状況や理解の状況が把握できる。また、学習感想を有効活用することも評価を補うよい手法になる。

(2) 子どもの学習状況を質的に捉える

評価規準は、子どもの学習状況を質的に捉えるものである。数量、図形等の内容ごとに「概ね満足できる」状況を規準とし、子どもの学習状況が「概ね満足」と言えるかを判断することが重要なポイントである。

理

村山 哲哉 先生 「これからの理科教育の動向」

1 理科における言語活動について

理科においては、体験を土台とした言語活動の充実でなければならない。共通体験をしても、子どもたちの見方や考え方は様々である。ばらばらでスタートしてもよいが、そのままではいけない。言葉というものを使いながら科学的な見方や考え方にしていくことが大切である。理科では、具体から抽象へと向かわせる問題解決の場に加え、抽象から具体に向かわせる活用の場における言語活動を大切にしたい。活用における言語活動により、日常生活や実際の自然で見られる事物・現象を自分が身に付けた見方や考え方で解釈していき、役に立つ理科にしていく必要がある。



2 言語活動の充実を図る場について

科学的思考・表現を育てるために、予想や仮説を立てる場面では、しっかりと言語化を図り、子どもの考えを顕在化させることが大切である。そのためには、考えをノートに書くことが望ましいが、時間がなければ、複数の考えを示し、自分の考えを挙手やネームプレートで表明させたい。また、実験や観察の結果を考察する場面では、結果を基にして、自分の予想や仮説と照らし合わせて解釈し、説明するようにさせたい。

3 思考・判断と表現の一体化

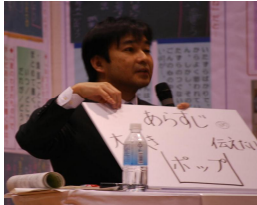
思考・判断したことと、表現活動を一体として捉えることが必要である。科学的思考・表現を見るポイントは、観察・実験の前と後。評価規準をしっかりと設定して、授業を構築していくことが肝要である。

シンポジウム

研究会の最後を締めくくった本シンポジウム。本校が平成15年度より積み重ねてきた「思考力」研究と、新学習指導要領の方針の両側面から、『思考力』を育成する言語活動の在り方を探りました。討論の拠点となった全体授業（国語科）の過程と対応させながら、シンポジウムの要点をまとめてみました。

思考へのいざない

あらすじを把握するという「読む能力」に対して、ポップ作りという、それにふさわしい言語活動を設定しています。この密接な関連性があることで初めて、学習が子どもに必要なものになります。つまり、そこで思考が顕在化するので。



【水戸部修治先生】

課題を自分のものとして考えていこうとするときには、かなり情緒的な受け止めをしています。社会科においても、具体的な事実と「情緒的な受け止め」が考えられることのエネルギーとなります。

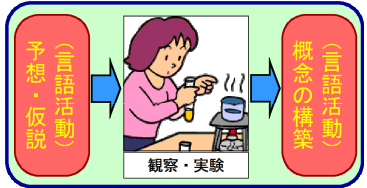
【澤井陽介先生】

体験と言語活動

「見通し」「振り返り」は、問題解決のプロセスにおいて大変重要です。理科にあてはめて考えれば、それは、観察・実験の前後に位置付きます。

観察・実験の前とは「予想・仮説」であり、後とは「自分の概念の構築」です。

【村山哲哉先生】



算数的活動においては、具体物を用いて体験をし、それを数や式、図を用いて説明するという活動を設定しています。数や式、図とは広い意味での言葉です。すなわち、体験は言語活動の裏打ちなのです。

【吉川成夫先生】

第4学年 国語科「物語の魅力ポップにのせて - 『ごんぎつね』 -」

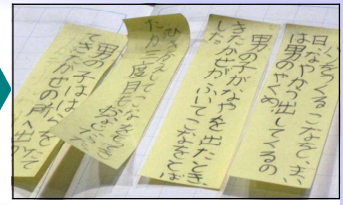
【学習問題の設定】
〇〇さんのポップの
いっしょに方を見よう



【見通し～ポップの比較～】

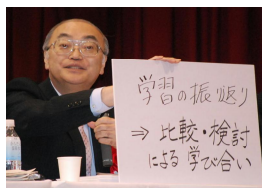


【自力解決】



【振り返り～カード操作の言語化～】

比較・検討は、「振り返り」におけるとてもよい学習であり、そこで言語活動の充実が図られます。異なるものの比較によって、それぞれのよいところが明らかになります。そのような振り返りは、次の新たな「見通し」につながります。



【吉川成夫先生】

「自分の好きを」（感情・情緒の基盤）、「こういうふうな相手に伝えるんだ」（コミュニケーションの基盤）、「そのためにあらすじを捉える必要があるんだ」（知的活動の基盤）、この3つの中で活動が展開されている、このことがとても重要です。

【水戸部修治先生】



【澤井陽介先生】

見通しをもつ時に「前に学んだことが使えないかな」「あの考え方が使えそうだな」と振り返らせる。そして使ってみた後で「やっぱり使えた」と、このような経験を繰り返していくことで、転移・応用の力が育っていくのです。

PISA調査によると、子どもたちの科学への関心は低く、科学を学ぶ意義を十分認識できていないという結果になっています。学校理科で終わらない学習の構築が求められています。



【村山哲哉先生】

「見通し」と「振り返り」の関係

「思考力」育成のためには、知的活動の基盤としての言語活動はもちろんのこと、コミュニケーションや感性・情緒の基盤としての言語活動も、そこに大きく関わってきます。また、各教科における体験の前後の言語活動の意義、「見通し」と「振り返り」の重要性も共有できました。4月からの学習指導要領全面実施に向け、大切な指針を示してくださった4名の先生方、本当にありがとうございました。

実際の場に生きる学びを

次年度研究に向けて

今研究会に対して、皆様からいただいた貴重なご指導・ご助言を以下のように整理しました。本校の今後の研究の指針とさせていただきます。

＜講演・シンポジウムから＞

外国語活動講演

各単元ごとに、3つの評価の観点（コミュニケーションへの関心・意欲・態度、外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付き）を基に、子どもの具体像を設定し、学校で共通理解を図りながら評価することが大切。

教科別分科会講演

- 【国語科】 指導事項を柔軟に組み替えながら、言語活動を有機的に組み合わせることで、指導に生きる評価規準を設定することが大切。
- 【社会科】 子どもに、思考のベースである体験を基にした言葉で、その考えに至った過程を表現させ、評価していくことが大切。
- 【算数科】 算数的活動の一つとして、子どもが、相手にも自分自身にもよく分かるように説明を工夫する言語活動を位置付けることが大切。
- 【理 科】 予想や仮説を立てる場面、観察や実験から得られた結果を解釈・説明する場面、考えを顕在化させ、言語活動を行うことが大切。

シンポジウム

- 授業では、体験の前と後の場面で言語活動を充実させることが、「思考力」を伸ばすために非常に大切である。
- 体験の後の言語活動では、子どもが各教科特有の体験に裏打ちされた言葉を用いて言語活動を行うことが大切である。

＜アンケートから＞

- 全面実施される指導要領での重要ポイントである「思考力」「言語活動」に焦点を当て、両者の関連を明確に捉えられる研究であった。
- 授業での子どもの姿から、教材や板書の有効性が確認でき、今後の実践に向けて、大変よい参考になった。
- 新しい学習内容に取り組み、提案性のある授業が多かった。

＜今後の指針＞

英語活動では「思考力」を基に、コミュニケーションを図る具体的な姿を描きながら、子どもを見つけていきます。

各教科の授業ではそれぞれ教科特有の言語活動と、その充実の方向を大切にします。
さらに言語活動の充実を図り、一人一人の子どもに「思考力」を育てる授業の在り方を追求していきます。

子どもの学ぶ姿や新学習指導要領で求められている授業像等を見つめながら、「思考力」と「言語活動」を関連付けた研究を、さらに進めていきます。

あ と が き

教 頭 ^{みやけ ひさのり} 三宅 永哲

本年度の教育研究発表会では、「知の更新をめざした『思考力』の育成」について、2年間の研究のまとめを提案いたしました。参会者の皆様からのアンケートから、思考の術である「思考様式」が遅れて進む子にとっても有効な手助けになること、それらを単に教え込もうとしているのではないことにご賛同いただけたと分かり、職員一同喜んでおります。

また、個の「実感・納得」や集団での「承認・合意」の実際を子どもの言語活動で見ていただきました。授業後のリフレクションでいただいた貴重なご意見を踏まえて、現在、次年度研究の方向性を固めつつあります。今後も「授業で勝負する」を合い言葉に研鑽を積んでまいりたいと考えています。ご支援やご指導をお願い申し上げます。

編 集 委 員

山内 秀 則	大 山 貴 久
中 田 祐 二	二 神 朋 人
小 出 泰 弘	宮 崎 彰

平成23年 3月18日

香川大学教育学部附属坂出小学校
TEL 0877-46-2692 FAX 0877-46-5218
E-mail sakaide@ed.kagawa-u.ac.jp